岡山畜産便り 1962.01

今年こそ和牛の持てる力を

和牛試験場長　林　　正　夫

明けましておめでとうございます。

新しい農業への推進力として、畜産に寄せられた期待がひじょうに大きかったので、牛に明け牛に暮れた昨年は、私たちにとってやりがいのある反面また力不足に慙悔たる丑年だったように思っています。

和牛は、自給の粗飼料を高度に利用して生産を挙げる能力が高いこと、飼養管理に必要な労働力は少量かつ質的、技術的にも劣ったものでも間に合うこと、資源が豊富にあってしかも飼養基盤が確立されていること、などの理由で、今話題となっている多頭化へ最もはいり易い家畜であることには誰しも異論はないと思っています。

肉資源が不足して多量の輸入肉で需給のバランスをとっているこのごろであって見れば、その重要性はなおのことだと思っています。それにもかかわらず、一般に酪農・養鶏・養豚ほどに各種報道機関に取り上げられないのは何故か。これらについて反省材料を提起し、将来に備えることも、新しい年を迎えるに当って意義があろうと思います。

これからの農業は企業的になるでしょう。その時和牛がどのような役割をもつようになるかということですが、現有資源も豊富であり、飼養基礎も備わっていて、飼養管理技術も間に合っている和牛は、比較的小額の資本で、余り骨折らないで多頭化できる強みをもってはおります。一頭一頭が評価のむずかしい繁殖牛などは、共同化して大経営にもって行くことは一般には困難視されておりますが、肥育経営などは、資金回収も早く、急速に多頭飼育にもって行って企業的にやりたいものです。

企業的な酪農・養鶏・養豚が盛んになりましたので、家畜がふえる以上に購入飼料の所要量の割合が大きくなって来ましたが、将来ますますその傾向は強まる見透しですが、和牛は草をよく消化吸収して肉を生産し、仔を産む能力が最も優れた家畜です。改良された草と飼料作物があれば、一部の肥育を除いては、すべて濃厚飼料なしで和牛を飼って能率的に生産を挙げることが可能です。和牛飼養農家の中にはまだ勉強不足で、濃厚飼料に頼り過ぎたり、逆に昔ながらのワラとヌカの飼い方のままであったりというのがあるように見聞しています。稲ワラを飼料の中に入れて考えている間は、畜産はまだ本物ではないと断言していいでしょう。また、繁殖牛に濃厚飼料を必要とするという考えも過去のものとしなければなりません。改良された草地に放牧されて自由に運動かつ十分な栄養をとり、良質の乾草やサイレージ等がふんだんに給与されて、スクスクと育ちまた良い仔を産むような飼い方が徹底した時、和牛は最も少ない投資で着実に収入を挙げる健実な畜産となると思います。

和牛は投げやりに飼っても直ちに能力の低下が目立ちません。そのため農家の和牛に対する勉強が足らないで、和牛を甘く見て粗末にしていると思われてなりません。折角の豊富な資源を活用して生産に役立てたいものです。

和牛の取引きの問題は、今もなお深刻です。生産農家の努力に対して、正常な酬いがあってしかるべきです。と言っても、肉が高くては消費者からソッポを向かれてしまいます。生産者価格の高いことばかりを望むのもどうかと思います。私が言いたいのは、誰しも同じ考え方だと思いますが、流通過程を合理的に改めることです。肉については規格も制定され、枝肉市場も整備されて、着々と正常取引へ近づきつつあります。また産地の仔牛とか肉牛のように評価し易いものは余り問題なく正常取引きが行なわれます。しかし、まだ和牛の取引きは近代化の最もおくれているものの一つであることに間違いはありません。これを打開する道は百の法律よりも、生産者団体と農民とが一体となって、勇気を出して共同の購買販売態勢を整えることが何よりと考えています。

話が理づめになり過ぎましたが、曲り角にある農業を迷わせないで引っぱって行くために、和牛の持てる力を遺憾なく発揮するよう切に祈って、今年もまた皆様と一つになって苦しみ努力したいと存じます。